

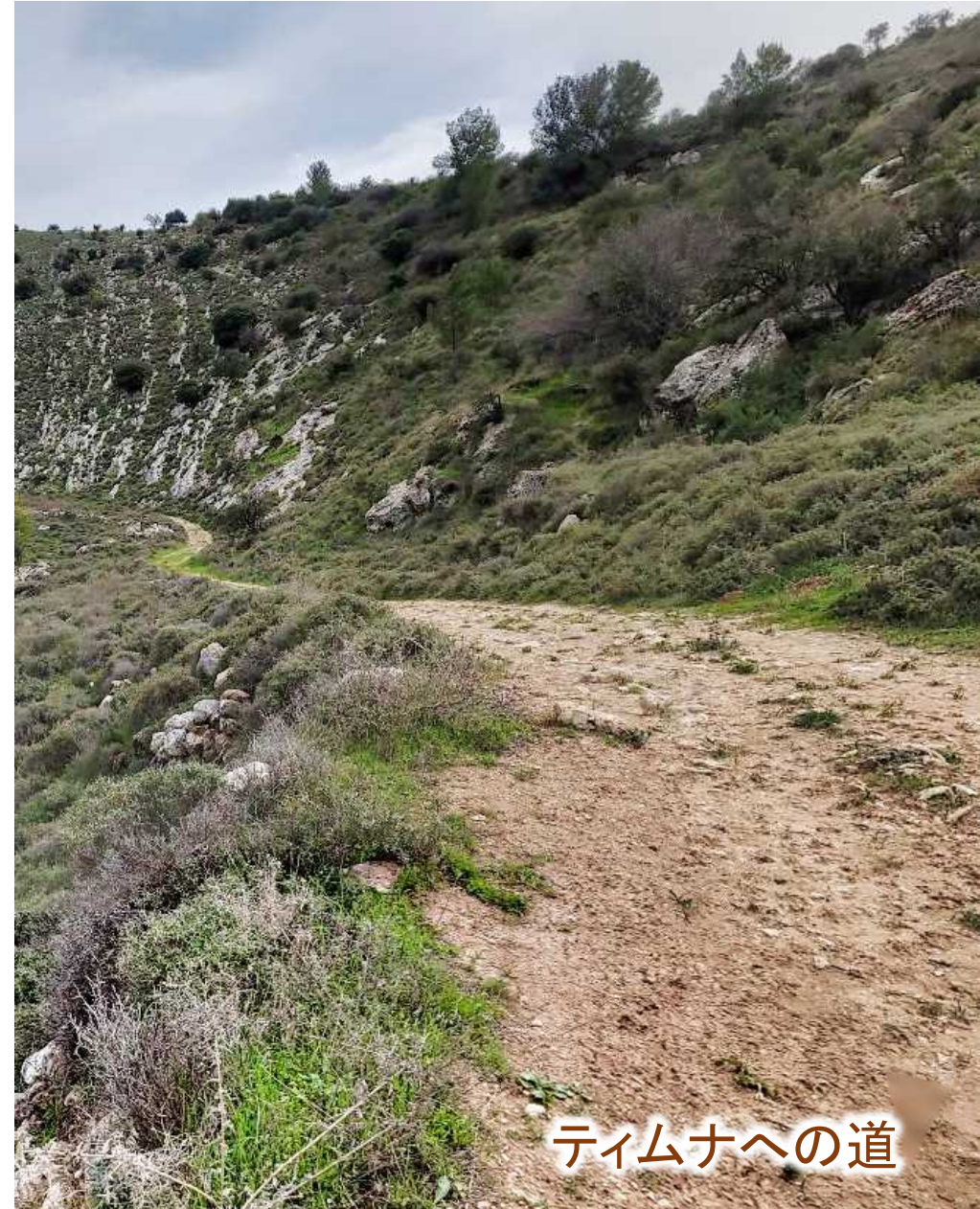
士師記  
聖徒伝 73

# 「主の恵みを むさぼるな」

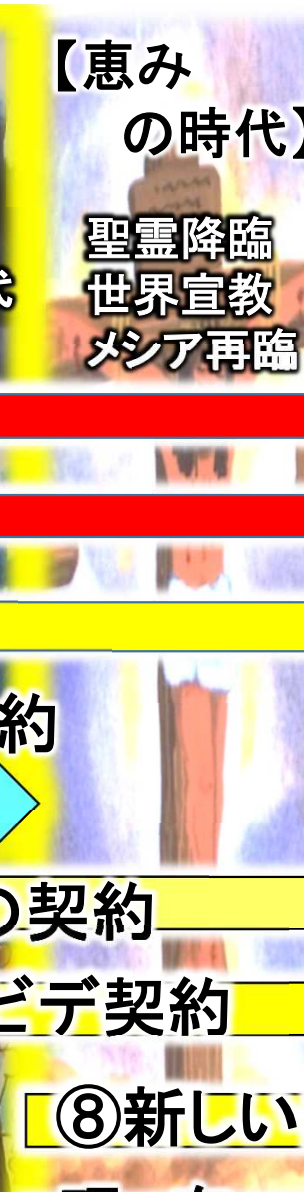
士師記13～14章 サムソン・前半

## 【今日のアウトライン】

- 0. イントロダクション
- I. サムソンの受胎告知 13章
- II. サムソンの結婚 14章
- III. まとめと適用
  - 無条件の恵みを注がれて  
祝福の道をこそ歩もう



ティムナへの道



【無垢の時代】

【良心の時代】

【人類統治の時代】

【約束の時代】

【律法の時代】

【恵みの時代】

【御国の時代】

天地創造

墮罪  
~大洪水

バベルの塔事件

アブラハム  
~ヤコブ

イスラエル王国時代  
メシア初臨

聖霊降臨  
世界宣教  
メシア再臨

千年王国  
大審判  
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

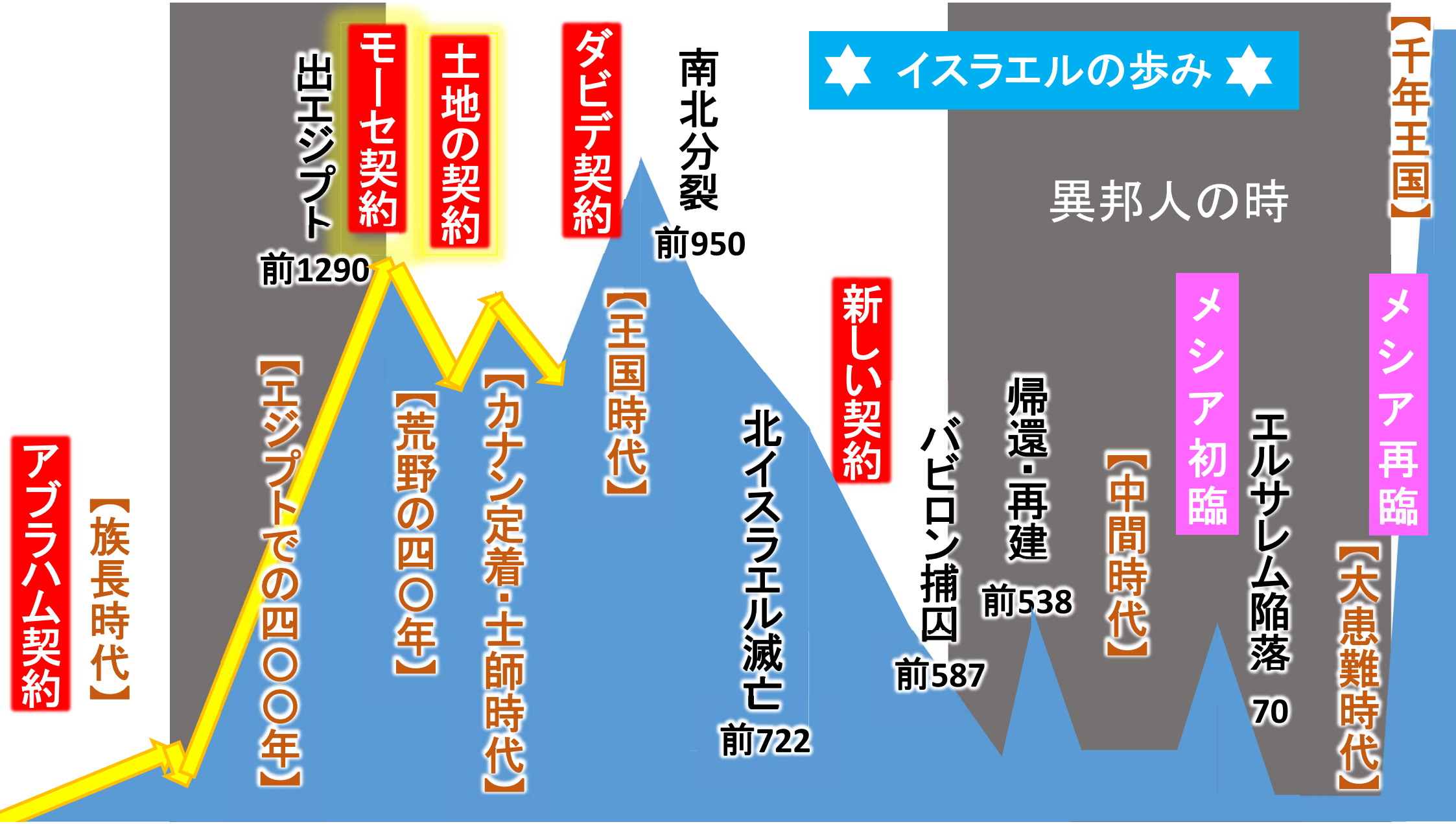
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

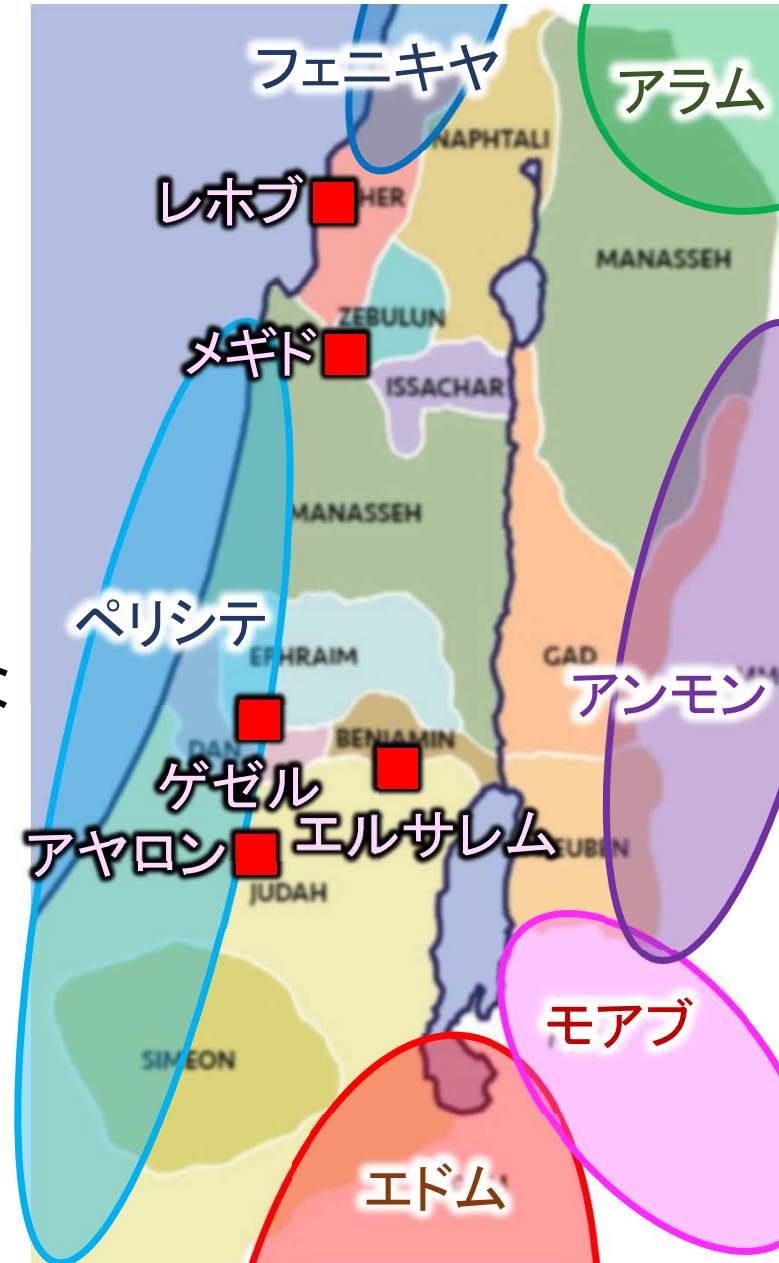
未来

★ イスラエルの歩み ★



## 【残された土地】

- ヨシュアに率いられたイスラエルは、12部族それぞれの相続地を手に入れた。
- しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。



## 【士師・さばきつかさ・とは？】

- 神が立てた、イスラエルの一部族のリーダー。  
士師という正式な地位があるわけではない。  
裁判官。政治的、軍事的指導者。  
民の解放者、救済者。➡いろいろな立場を兼任。

## 【士師記で繰り返されるイスラエルの罪】

- ❶ 背信 ...カナンの偶像礼拝に取り込まれる
- ❷ 裁き ...主が異邦の民を用いてイスラエルを裁く。
- ❸ 悔い改め ...イスラエルは主に助けを求める。
- ❹ 士師による解放 ...主は、士師を送り敵を退ける。



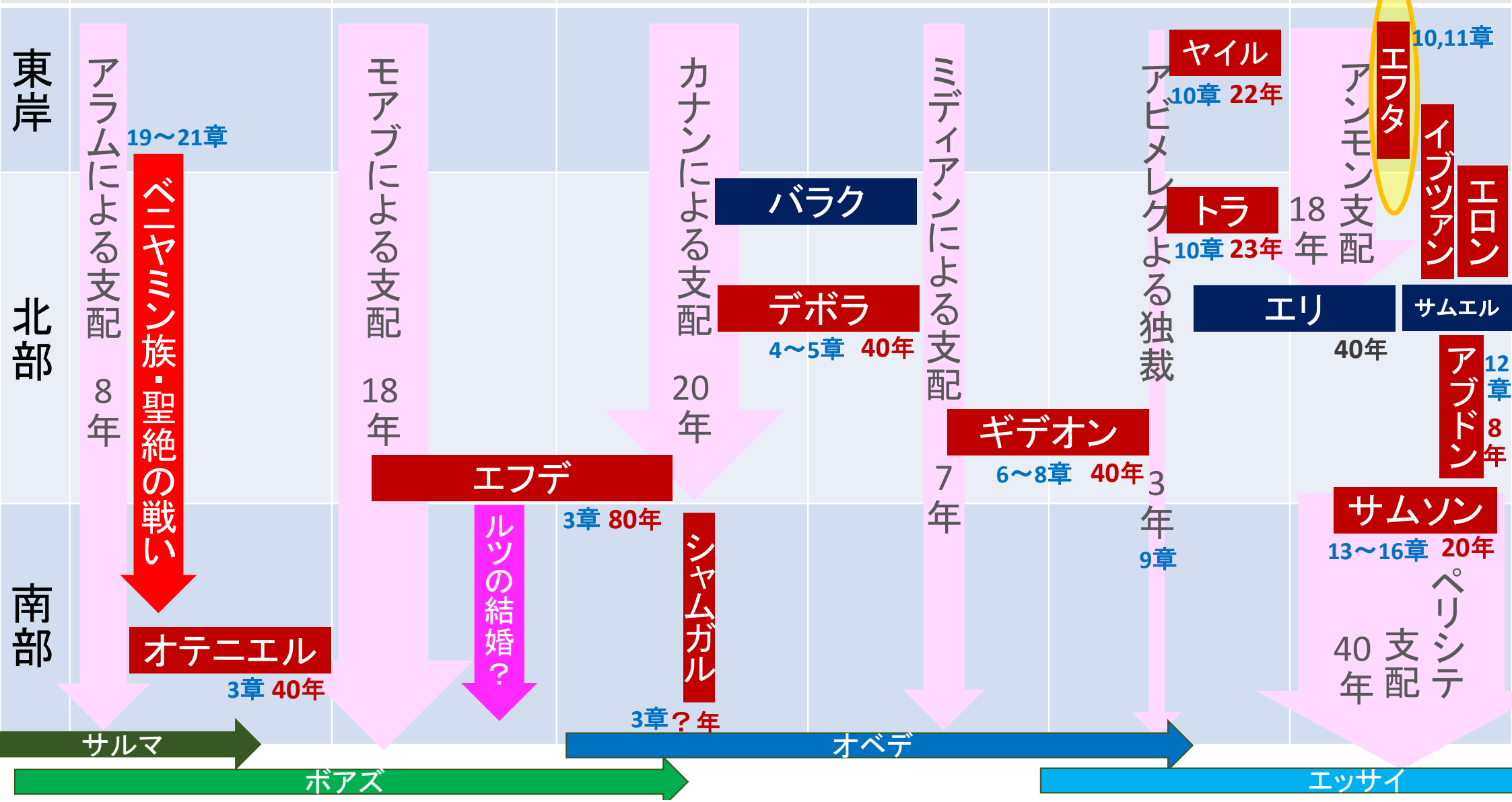
士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7～11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12～30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1～5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	6:1～8:32	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1～2	イッサカル	?
⑦ヤイル	10:3～5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6～11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イプツァン	12:8～10	ゼブルン	?
⑩エロン	12:11～12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13～15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1～16:31	ダン	ペリシテ人



# 【士師の時代】

BC1200

BC1100





【二方面からの異民族による裁き】 士師10:7

【主】の怒りはイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをペリシテ人の手とアンモン人の手に売り渡された。

■ 士師時代の最後にイスラエルを蹂躪した二部族。

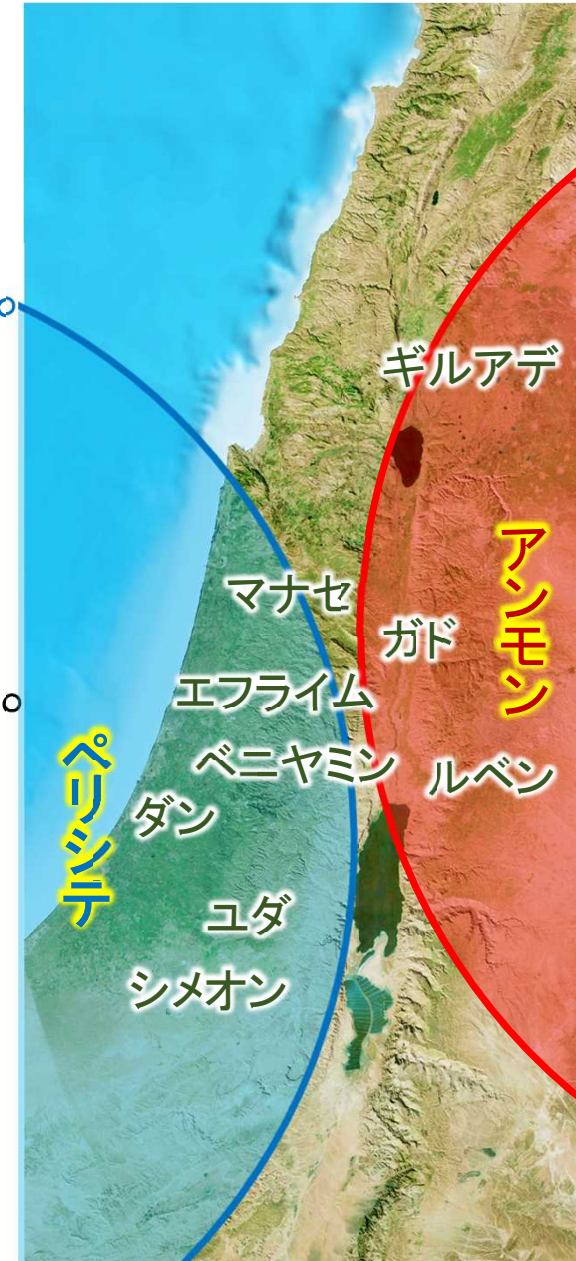
① ヨルダン川東岸ではアンモン人

...アブラハムの甥ロトの子孫。➡士師エフタが対決。

② 地中海沿いではペリシテ人

...高度な文明と強大な軍事力を誇る海洋民族。

➡ダン族の士師サムソンが対決



## 【士師の時代のイスラエルの惨状】

- 初期にベニヤミン族が聖絶。生き残りはわずか。  
→ その子孫に登場するのが、士師エフデ。
- ヨルダン川東岸中部にいたはずのガド族は、一度も登場せず。→ 異邦の支配が苛烈？
- 後期、エフライム族は、エフタとの戦いで42,000人が虐殺。主力部隊は全滅。  
→ ヨシュアの時代の人口が、32,500人。
- ダン族は、初期に、一部が最北部へ移住。

指導者に、ふさわしいとはいえない士師たち。  
罪を繰り返し、悪化していくイスラエル



# I. サムソンの受胎告知

士師記12章

ツォルアの山地



## 【サムソンの出身・ダン族について】

### ■ ヤコブの預言

創49:17 ダンは道の傍らの蛇となれ。通りのわきのまむしとなれ。彼が馬のかかとをかむと、乗り手はうしろに落ちる。

■ ヤコブの第5子、ラケルの女奴隷ビルハの子。

■ 当初得た相続地は、強敵ペリシテ人の地にまたがり、常に敵に脅かされた。

■ 間もなく、ダン族の一部は、ナフタリ族の隣、ヨルダン川東岸に移動。(士師18章)

■ サムエルの時代以降は、北の地が中心に。北王国の時代には、金の子牛が設置された。



## 【イスラエルの罪・ペリシテ人の支配】 士師13:1～2

イスラエルの子らは、【主】の目に悪であることを重ねて行った。そこで【主】は四十年間\*、彼らをペリシテ人\*の手に渡された。

\* ペリシテ人の支配は、最も長く続いた。

➡サムソンが士師となったのは、この間の出来事。

\* 優れた文明と強力な軍隊を持つ海洋民族。

➡人種的には、ヤペテ系？(ヨーロッパ系？)

カナン人は、ハム系。イスラエルは、セム系。



## 【ツオルアのマノア】 士師13:2～3

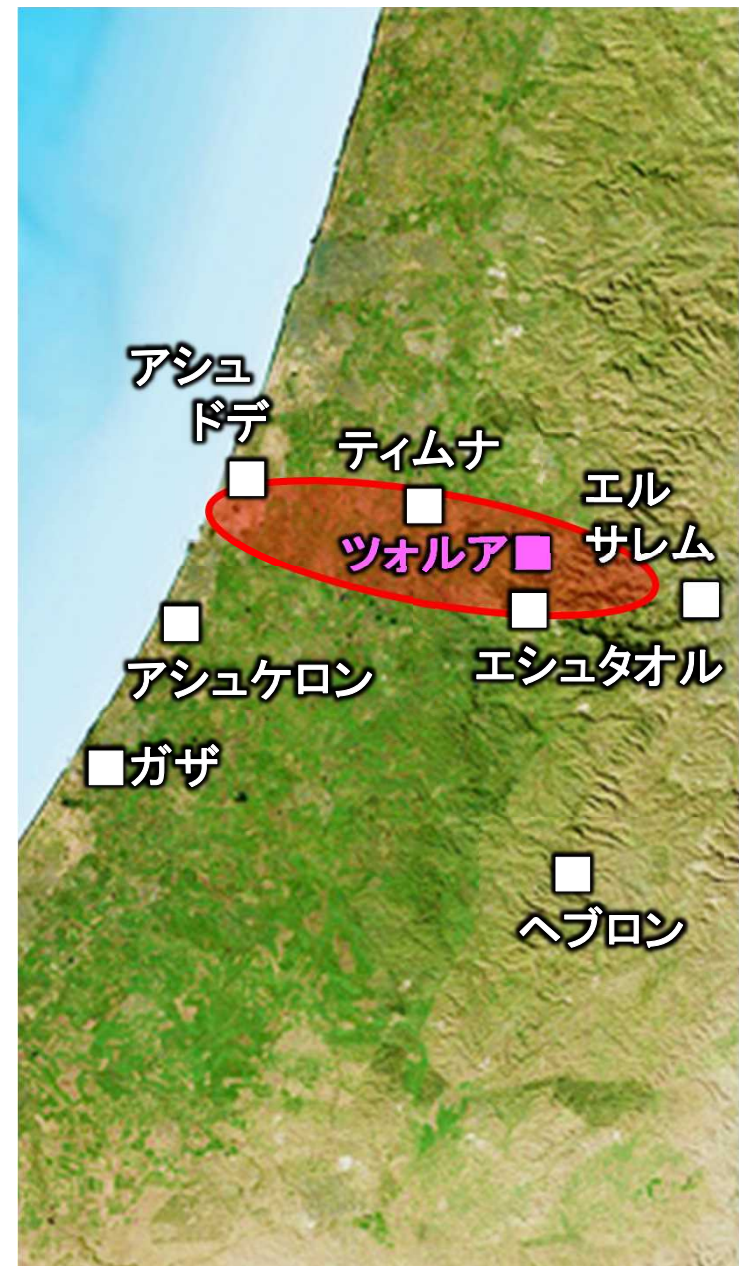
さて、ダンの氏族に属するツオルア\*出身の一人の人がいて、名をマノアと叫んだ。彼の妻は不妊で、子を産んだことがなかった。

【主】の使い\*がその女に現れて、彼女に言った。「見よ。あなたは不妊で、子を産んだことがない。しかし、あなたは身ごもって男の子を産む。」

\* ツオルア ...山地の村。現在は自然公園が。

● ダンの相続地で実際に住んでいたのは、山地に限られていた。平地はペリシテ人が支配。

\* 主の使い ...人となられる前の子なる神。



## 【ナジル人の宣告】 士師13:4～5

「今後あなたは気をつけよ。ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。汚れた物をいっさい食べてはならない。見よ。あなたは身ごもって男の子を産む。その子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は胎内にいるときから、神に献げられたナジル人\*だから。彼はイスラエルをペリシテ人の手から救い始める。」

\* **ナジル人** ...律法に基づく請願を立てた者(民6章)  
誓願の期間、ぶどう酒を絶ち、髪を伸ばした。  
サムエル、洗礼者ヨハネも生まれながらのナジル人

究極のナジル人は、メシアであるイエス

あまりにほど遠いけど  
サムソンはメシアの影

ツォルアの山地



## 【告知を受け入れたマノア】 士師13:6～8

- 女は夫マノアに伝えた。相手が主の御使いだとは理解せず。預言者\*の一人と思っていた？
- 妻の名はない。特筆すべき信仰でないから？  
➡告知を、「信じた」とは書かれていない。

- マノアは、伝え聞いた言葉を受け入れたが、どう育てたらよいか分からず、主に祈った。

13:8「ああ、主よ。どうか、あなたが遣わされたあの神の人\*を再び私たちのところに来させ、生まれてくる子に何をすればよいか教えてください。」



ツォルアの山地



## 【主の御使いの再訪】 士師13:11～14

■主の御使いは、再び妻に現れ、妻はマノアに取り次いだ。

13:12 マノアは言った。「今にも、あなたのおことばは実現するでしょう。その子のための定めと慣わしはどのようなものでしょうか。」

■主の御使いは、その子にぶどう酒を断たせ、髪を切らせず、ナジル人として育てることを改めて命じた。

➡最初に命じられた以上のことはなかった!!



ツォルアの山地

## 【マノアの霊的鈍感さ】 士師13:15～18

■ マノアは客人を引き止め、もてなそうとした。

➡ まだ客人の正体を理解せず。霊的鈍感さ。

■ 主の御使いは、食事を断った。

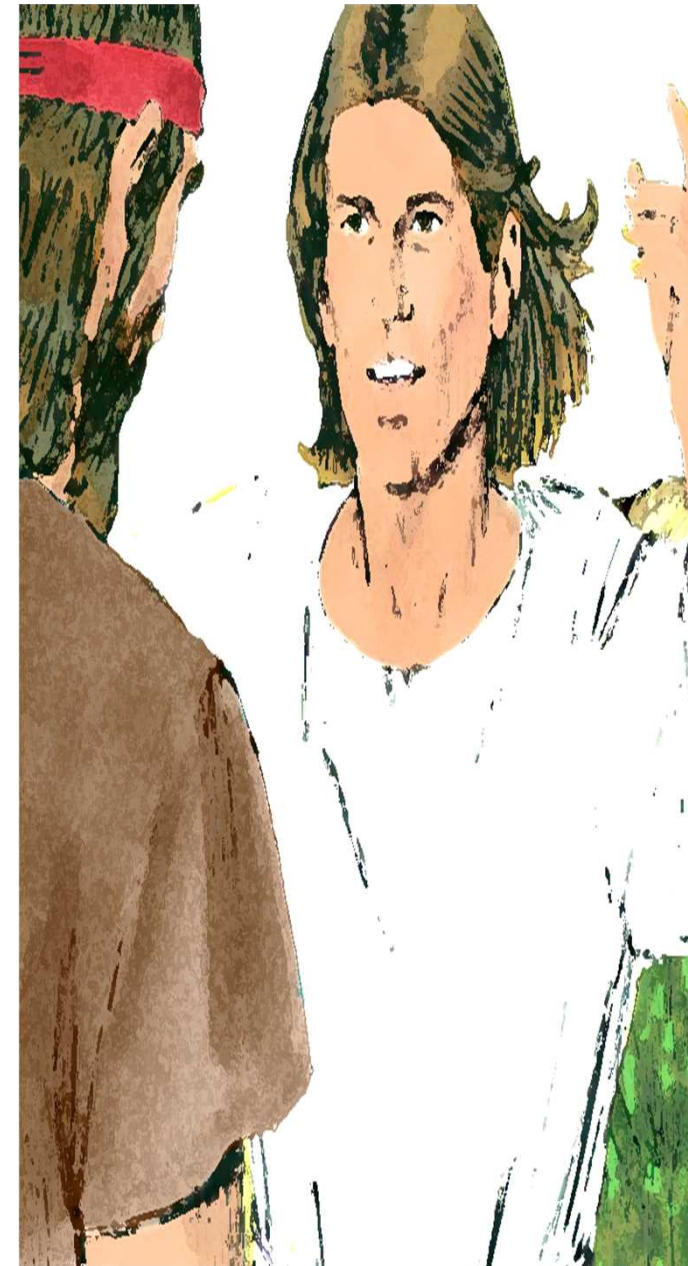
➡ マノアとの親しい交わりを拒んだということ。

■ さらに名をほめたたいと言うマノアの間違いに...

13:18 【主】の使いは彼に言った。「なぜ、あなたはそれを聞くのか。わたしの名は不思議\*という。」

\* 不思議(ピリー) ➡ 神にのみ対する呼び方。

【メシア預言】イザヤ 9:6 その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。



## 【サムソンの誕生】 士師13:19～25

■ マノアは、子やぎと穀物を岩の上で主に献げた。

13:20 炎が祭壇から天に向かって上ったとき、【主】の使いは祭壇の炎の中を上って行った。マノアとその妻はそれを見て、地にひれ伏した。

■ 主の御使いだと知ったマノアは、「必ず死ぬ」と恐れおののいた。妻が状況を説明し、不安をしずめた。

13:24 この女は男の子を産み、その子をサムソン\*と名づけた。その子は大きくなり、【主】は彼を祝福された。

13:25 【主】の霊は、ツオルアとエシュタオルの間の、マハネ・ダンで彼を揺り動かし始めた。

\*「太陽」という意味の名を与えられたサムソンだが...



## Ⅱ. サムソンの結婚

士師記13章

ティムナ付近



## 【ティムナに下ったサムソン】 士師14:1~2

サムソンは、ティムナ\*に下って行ったとき、ペリシテ人の娘で、ティムナにいる一人の女を見た。彼は上って行って、父と母に告げた。「私はティムナで一人の女を見ました。ペリシテ人の娘\*です。今、彼女を私の妻に迎えてください。」

\* **ティムナ** ...ユダがカナンで祭りに訪れ、息子の嫁タマルと関係を持ったのが、**ティムナ!!**  
→サムソンも、異教の町に魅了された。

\* **イスラエルやカナンとは違う容姿に惹かれた？**

■ **誓願を立てたナジル人にはあるまじきこと!!**

→マノアの子育ては、明らかに大失敗!!



## 【サムソン、獅子を倒す】 士師14:5~7

- 折れた父母と、サムソンはティムナにくだった。ぶどう畑を避け、サムソンは一人で回り道をした。そのとき、一頭の若い獅子が襲ってきた。

14:7 このとき、【主】の霊が激しく彼の上に下ったので、彼はまるで子やぎを引き裂くように、何も手に持たず獅子を引き裂いた。

- 聖霊が、尋常でない力をサムソンに与えた。
- 死体に触れたナジル人は、髪を剃り、きよめの期間を過ごし、ささげものをしなければならない。  
→しかし、サムソンは両親に黙っていた!!
- サムソンは、ティムナの娘と婚約した。



ナジル人の誓願を破ったサムソン!!

## 【婚宴で】 士師13:8～11

- 婚約期間が過ぎ、サムソンはティムナに向かった。
- 倒した獅子を一人で見に行くと、死体に蜂が群れ、蜜があった。サムソンは、蜜を食べ、両親にも与えた。
- サムソンは、獅子の死体からとったことは黙っていた。
  - ➡ さらに律法破りを重ね、両親にも破らせた。
- ティムナの、妻の父の家で婚宴が始まった。
  - ➡ イスラエルの祝宴は、7日間続いた。
- 30人の男たちが、客人として、サムソンの前に連れてこられた。 ➡ 見張り役？



## 【サムソンの謎かけ】 士師14:12～13

■ 婚宴の余興に、サムソンは謎かけをした。

「さあ、あなたがたに一つの謎をかけよう。もし、あなたがたが七日の祝宴の間に、それを見事に私に解き明かし、答えを見つけることができたなら、あなたがたに亜麻布三十着と晴れ着三十着\*を差し上げよう。

もし、それを解き明かすことができなければ、あなたがたが私に、亜麻布の衣服三十着と晴れ着三十着を差し出すことにしよう。」彼らは言った。「謎をかけなさい。われわれは聞こう。」

\*いずれも高価な着物 → 賞品としては非常に高額。





## 【サムソンのかけた謎】 士師14:14～15

そこで、サムソンは彼らに言った。「食らうものから食べ物が出た。強いものから甘い物が出た。」彼らは三日たっても、その謎を解き明かすことができなかった。七日目になって、彼らはサムソンの妻に言った。「おまえの夫を口説いて、あの謎をわれわれに明かさない。そうしないと、火でおまえとおまえの父の家を焼き払ってしまうぞ。おまえたちはわれわれからはぎ取ろうとして招待したのか。そうではないだろう。」

- 謎解きの答えは、サムソンにしか分かりようがない。
  - ➡サムソンにも、男たちへの敵対心があった？
- 婚宴の最終日、彼らはサムソンの妻を脅迫した。

神への罪を  
謎かけにする不遜



## 【根負けしたサムソン】 士師14:16～17

そこで、サムソンの妻は夫に泣きすがって言った。「あなたは私を嫌ってばかりいて、私を愛してくださいません。あなたは私の同族の人たちに謎をかけて、それを私に明かしてくださいません。」サムソンは彼女に言った。「見なさい。私は父にも母にもそれを解き明かしてはいないのだ。おまえに解き明かさなければならないのか。」彼女は祝宴が続いていた七日間、サムソンに泣きすがった。七日目になって、彼女がしきりにせがんだので、サムソンは彼女に明かした。\*それで、彼女はその謎を自分の同族の人たちに明かした。

\* 怪力とは裏腹の、サムソンの精神的なもろさ。幼稚さ。



## 【ペリシテに下った神の裁き】 士師14:18～19

町の人々は、七日目の日が沈む前にサムソンに言った。「蜂蜜よりも甘いものは何か。雄獅子よりも強いものは何か。」すると、サムソンは彼らに言った。「もし、私の雌の子牛で耕さなかったなら、あなたがたは私の謎を解けなかっただろうに。」

そのとき、【主】の霊が激しくサムソンの上に下った。彼はアシュケロンに下って行って、その住民を三十人打ち殺し、彼らからはぎ取って、\*謎を明かした者たちにその晴れ着をやり、怒りに燃えて父の家に帰った。サムソンの妻は、彼に付き添った客の一人のものとなった。\*

- \* アシュケロンの裕福なペリシテ人からはぎ取った。
- \* もともと嫁にやる気はなかった？



## IV. まとめと適用

無条件の恵みを注がれて  
祝福の道をこそ歩もう

ヨルダンの山地



## 【ティムナでの事件の背景】

■ ペリシテ人は、イスラエルを支配し、苦しめ続けていた。

➡ 自らの力を誇り、イスラエルを侮っていたのだろう。

サムソンを侮蔑する態度にも如実に現れている。

■ 主は、アブラハム契約に従い、イスラエルを守り、ペリシテを裁いた。

➡ “わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。

創 12:3” アブラハム契約の付帯条項。

■ サムソンに義はない。サムソンはただ、神の器として用いられただけ。

## 【士師記の本当の主役とは？】

■ 士師記で最後に登場する士師サムソン。

生まれながらのナジル人にも関わらず、その信仰はひどいもの。

■ イスラエルは深い罪に陥り、他の士師たちも大きな欠けを抱えていた。

➡ 罪が深まるほどに、浮かび上がるのは、神の憐れみの大きさ。

■ 士師の時代は、律法の本当の目的が現れていく時でもある。

ロマ 5:20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。

しかし、罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。

➡ 聖書の告げる恵みとは、神の約束に基づく恵み。

■ サムソンに一方的に力を注ぎ、ペリシテを裁いたのは主の霊・聖霊。

➡ 士師記の本当の主役は、聖霊。

律法は、メシアを待ち望む信仰へ  
イスラエルを導く！

## 【サムソンを反面教師に学ぶこと】

- 生まれながらのナジル人として神に献げられたサムソン。  
ぶどう畑を避けて通ったように、自覚が全くなかったわけではない。
- 偶像崇拝のペリシテの町、その女に魅了され、欲望の虜となっていた。  
聖霊の力で獅子を倒しながら、主への感謝も恐れもなく、  
律法を破ったことへの悔い改めもなく、さらに罪を犯し続けた。  
➡サムソンは、ただ神の恵みによって、一方的に用いられただけ。
- “許容的御心”について考えよう。主は、あえて私たちの罪を放置され、  
的外れの願いをも叶えられる時がある。  
➡痛い目に遭わなきゃ分からない、という、罪深い状況だからこそ。
- 私たちは、実を通して、身をもって学ぶ。この学びの道には二つある。  
➡主に従って知るか。過ちを通して知るか。どちらを選ぶか問われている。

## 【信仰の成長を重ねていくために】

- 怪力とは不釣り合いな、精神的弱さ、幼さを抱えていたサムソン。  
ひたすら受け身で依存的、未熟な信仰。簡単に精神的に支配される。  
→ 与えられた恵みをただむさぼっているだけで、主への応答に欠けていた。
- 信仰の成長のために、主の恵みに応え、使命を果たすことが求められる。
- 今の時代、クリスチャンに与えられた共通の使命は、福音宣教。  
福音を宣言し、聖書の御言葉を慕い求めていくことが求められる。  
その姿勢が本物なら、必ず、精神的、霊的成長がもたらされていく。
- 信仰は投資。与えられた恵みを、どこにどのように投資すべきか考えよう。  
神が私たちに責任を問われるのは、チャレンジしなかった、そのことだけ。



「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

ただ、主の恵(めぐ)みをむさぼるだけのサムソンは、わたしたち自身(じしん)の姿(すがた)かもしれません。

どうか今、心から主に従(したが)い、主に応答(おうとう)する信仰(しんこう)へ導(みちび)いてください。

あたえられた恵みの福音(ふくいん)を 人々に告(つ)げる  
神の使者(ししゃ)として、ここから遣(つか)わしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」